

## 資源管理・海洋環境シリーズ

## 日高沿岸で漁獲されるスケトウダラについて

キーワード：スケトウダラ、日高沿岸、産卵、資源、刺し網漁業

## はじめに

スケトウダラは、卵はタラコ、明太子などの原料に、身はかまぼこ、すり身の原料として利用される魚で、北海道において重要な漁獲対象種の1つです。本種は北太平洋海域に広く分布し、1980年代中期にはアメリカ、ロシア、日本などにより600万トン以上の漁獲がありましたが、1990年代に入ると世界中の多くの海域で減少していきました。これを受けて、資源を漁業によって減少させることなく持続的に利用するためには、資源の管理が不可欠との認識が世界中で強まり、現在、日本も含めた各国でTAC（Total Allowable Catch：漁獲可能量）制度を基本とした漁獲量規制が行われています。

日本近海に分布するスケトウダラは、資源変動の異なるいくつかの群れ（系群）で構成されています。このうち太平洋系群は、東北太平洋～道東太平洋海域を主な生息域とし、我が国で最も大きな資源量を誇っています。このうち、渡島総合振興局函館市旧恵山町から日高振興局管内にいたる沿岸および沖合の道南太平洋海域（図1）では、噴火湾周辺海域を中心に12～1月に産卵場が形成され<sup>1)</sup>、集群するスケトウダラを対象にすけとうだら刺し網漁業（刺し網漁業）、沖合底曳網漁業（沖底漁業）、定置網漁業が営まれています。このうち、刺し網漁業は、この海域で最もスケトウダラの漁獲量が多い漁法であり、同海域でも、渡島・胆振

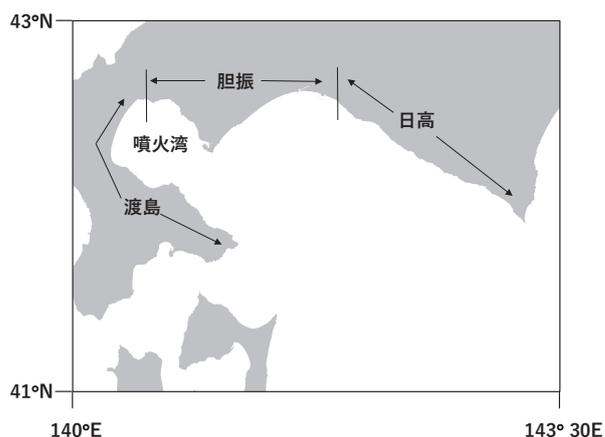


図1 道南太平洋海域（渡島、胆振、日高は各振興局で区分した。）

海域における漁獲が大部分を占めていました。そのため、これまでは渡島・胆振海域における漁獲物の情報が重要と考え、漁獲されたスケトウダラの体長組成、成熟状態、年齢組成など魚体測定から得られる生物データや、操業データを道南太平洋海域の資源や漁業の評価に用いてきました。

しかし、近年、今まで漁獲が少なかった日高振興局管内の割合が徐々に増えてきました（図2）。今後、さらに日高の漁獲量が増えていった場合、道南太平洋海域の資源評価を実施する上で、日高の情報も重要性が増していくことになります。そこで、これまで調査を実施していなかった日高の刺し網漁業によって漁獲されたスケトウダラの漁獲時期、体長組成、卵巣の状態を調べ、渡島・胆振海域と比較したので、その結果について紹介します。

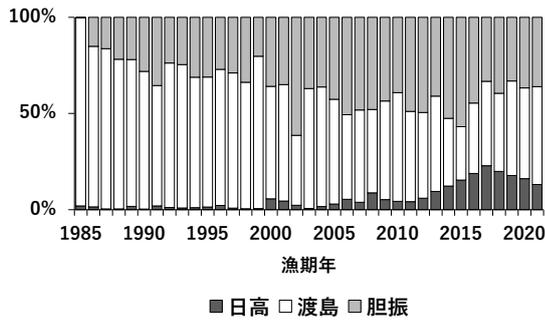


図2 スケトウダラの刺し網漁獲量に占める各振興局の割合

### 漁獲時期

月別の漁獲量割合（図3）を見ると、渡島・胆振では、10～12月が6割以上を占めています。一方、日高での漁獲は、渡島・胆振と比べ、1月の漁獲割合が多く、50%以上を占める年もあることから、漁獲時期が渡島・胆振より遅れていることが特徴と考えられます。

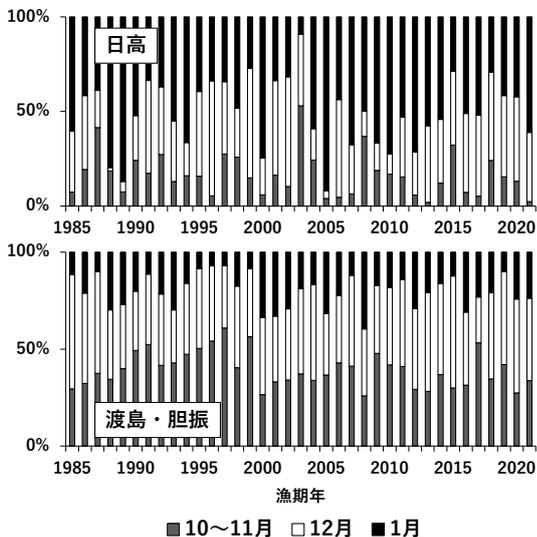


図3 刺し網漁業によるスケトウダラの月別漁獲量割合（上図が日高、下図が渡島・胆振）

### 体長組成

次に刺し網漁業で、どのような大きさのスケトウダラが漁獲されているかに注目しました。渡島・胆振（鹿部・登別）、日高（様似）の各地域で2020年12月および2021年1月に漁獲されたスケト

ウダラの尾叉長を調べた結果を図4に示しました。どちらの地域でも尾叉長410 mm前後の魚の漁獲が多く、日高で漁獲されているスケトウダラの大きさは、渡島・胆振側で漁獲されたものと大きな違いはないようです。

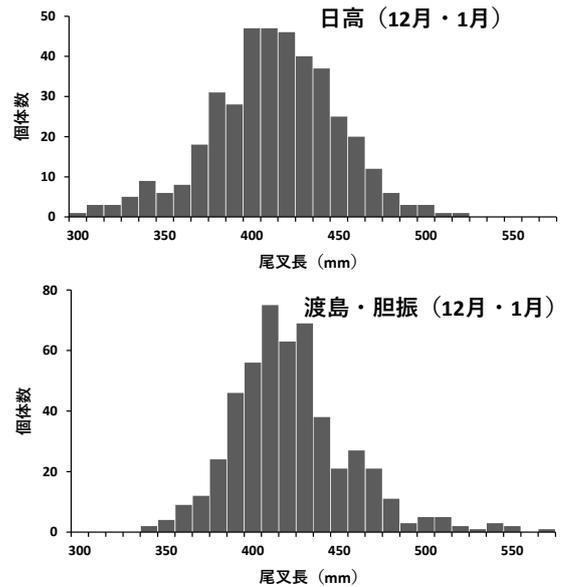


図4 刺し網漁業で漁獲されたスケトウダラの体長組成（2020年度漁期）

### 成熟度

さらに刺し網漁業で、どのような成熟段階のスケトウダラが漁獲されているかについて検討しました。2020年度に渡島・胆振（鹿部・登別）、日高（様似）で刺し網漁業によって漁獲されたスケトウダラ雌の卵巣の状態から成熟状態を調べた結果を図5に示しました。日高では渡島・胆振と比べ、早い時期（12月）から産卵中、産卵後の魚が見られました。漁業の操業位置や、漁獲の多い水深など、操業方法にも各海域で違いがある可能性が考えられるため、単純にまとめることは難しいですが、12月上旬ほどまでは、産卵中や産卵後の魚はほとんど見られず、12月末頃の漁獲から産卵中、産卵後の魚が見られるようになり、1月中

旬および1月末にはほとんどを産卵中、産卵後の魚が占めていました。このことから、日高沿岸に来遊するスケトウダラ親魚の産卵盛期は1月以降であると考えられます。ただし、漁獲した水深によって成熟度も変わるため、この点についてはもう少し検討が必要です。

把握や、スケトウダラの産卵生態解明につなげ、その結果を資源評価に役立てていきたいと考えています。

参考文献

1) 武藤卓志, 藤岡崇 (2021), スケトウダラ (道南太平洋海域), 2020年度資源評価書, 北海道周辺における主要魚種の資源評価, [https://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/central/section/shigen/04\\_walleyepollock\\_SPO\\_2021.pdf](https://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/central/section/shigen/04_walleyepollock_SPO_2021.pdf)

(高橋昂大・渡野邊雅道 栽培水試調査研究部  
報文番号B2472)

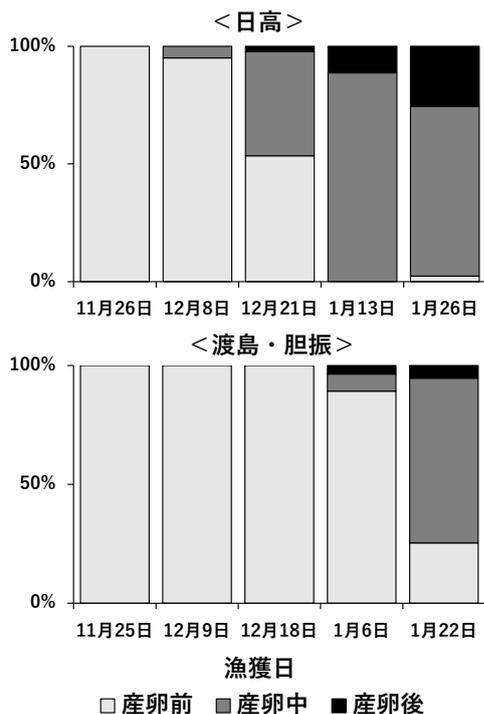


図5 刺し網漁業で漁獲されたスケトウダラ雌の成熟状態の観察結果 (2020年度漁期、上図が日高、下図が渡島・胆振)

おわりに

日高海域で刺し網によって漁獲されるスケトウダラは、1月の漁獲量が多く、渡島・胆振海域と比べ漁獲時期が遅いことが特徴です。2020年度漁期での漁獲物標本のサイズは、渡島・胆振海域と大きな違いはみられず、産卵盛期は1月以降であるということが確認されました。

日高海域でも、産卵中のスケトウダラが漁獲されていたことから、噴火湾周辺海域と同様、産卵海域となっている可能性が考えられます。今後も日高海域の調査を続けることにより、漁業実態の